

第 26 回腫瘍・免疫核医学研究会

司会の言葉

平 木 祥 夫 (岡山大学医学部放射線科)
久 保 敦 司 (慶應義塾大学医学部放射線科)

最近の CT, MRI などの機器・装置の改良により, 腫瘍領域においてもその画像診断の進歩はめざましいものがある。また, 近年これらの形態診断モダリティも一部で機能診断が可能となってきたが, 生理機能情報の把握においてははまだ核医学診断にはおよばない。そこで, 今回の研究会では腫瘍・免疫領域における新しい知見の取得と知識の整理, 今後の進むべき道をさぐる目的としてがんの疫学, 国際学会における最新のトピックス, 腫瘍イメージング製剤の基礎, 腫瘍の PET について 4 人の第一人者に講演をお願いした。

腫瘍については, わが国におけるがん死亡はいぜん死因別死亡率の 1 位を占めている。がん死亡やがん罹患の動向などその現状を知ることは, 腫瘍を扱う核医学医にとっては有益と考え, 腫瘍の疫学について専門的立場から分かりやすく解説していただく。

最近は米国核医学会 (SNM) をはじめとして, 国際学会に出席して研究発表し, 見聞を広める機会も多くなってきた。腫瘍・免疫核医学領域における欧米での動向を知り, 新しい知見を得ることは

興味もあり有意義と思われる。

最近の腫瘍イメージング製剤の研究では, 標識モノクローナル抗体と標識ペプチドを用いた方法がある。受容体イメージングに用いられる標識ペプチドは分子量も小さく, 免疫原性がなく投与後に抗体が産生されることがないため, 標識モノクローナル抗体と比べ, 安心して用いることができる。その中でもソマトスタチンレセプターイメージング製剤である ^{111}In 標識ペンテトレオチドはガストリノーマやカルチノイドの検出などに有用である。本研究会ではペプチドに関して, 臨床面に直結する基礎的薬理的事項などの話を期待する。

ポジトロン放出核種を用いた腫瘍診断では ^{18}F -標識デオキシグルコース (^{18}F -FDG) や ^{11}C -標識メチオニンなどがあり, 最近の ^{18}F -FDG の臨床研究では腫瘍の全身検索における有用性もいわれている。また, 商業的 ^{18}F -FDG 供給により臨床 PET も期待されており, 腫瘍 PET に関しても興味深い講演が期待できる。

今回の研究会が腫瘍・免疫領域において各会員の知識の向上と啓蒙に役立てば幸いである。